

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第324集

# 安栖野遺跡発掘調査報告書

畜産経営環境整備事業関連発掘調査



(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

あづまいの

# 安栖野遺跡発掘調査報告書

畜産経営環境整備事業関連発掘調査

## 序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,000カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後生に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実もまた重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとつてまいりました。

本報告書は、県営畜産経営環境整備事業奥羽北部地区の基盤整備（草地造成改良整備）工事の施工に間連して、平成10年度に調査した安栖野遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、縄文時代の土坑・陥し穴状遺構などのほか、縄文時代前期から晩期にかけての遺物が発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました盛岡地方振興局農政部・零石町御明神牧野農業協同組合・零石町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成11年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船 越 昭 治

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手郡零石町大字橋場第4地割字安柄野129番19ほかに所在する、安柄野遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、県営畜産経営環境整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と盛岡地方振興局の協議を経て、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県・遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号はJE02-2113・AZN-98である。
4. 発掘調査期間は、平成10年9月1日～10月28日、発掘調査面積は4,000m<sup>2</sup>である。室内整理期間は、平成11年1月4日～3月31日である。ともに浜田 宏・玉山健一が担当した。
5. 本報告書の執筆は、Iを高橋與右衛門、II・IVを玉山、それ以外を浜田が担当し、編集は浜田が行った。
6. 本報告書作成にあたり、次の方々にご指導・ご協力いただいた。(敬称略)  
高橋龍三郎（早稲田大学）、柴田慈幸（零石町教育委員会）、恵津森 義行（零石中学校）  
盛岡地方振興局、零石町御明神牧野農業協同組合、零石町教育委員会
7. 野外調査では零石町の作業員約20名、室内整理では当センターの期限付職員のご協力をいただいた。
8. 土層の観察は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1989)によった。
9. 遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、(株)ハイマーテックに委託した。
10. 石質の鑑定は、「花崗岩研究会」に依頼した。
11. 調査成果の一部は調査略報に概略を示してしているが、本書と記載事項が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
12. 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

## 目 次

序

例言

### <本文>

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の立地と環境 .....	2
1. 遺跡の位置と地形 .....	2
2. 遺跡の立地 .....	2
3. 基本層序 .....	2
4. 周辺の遺跡 .....	4
III 野外調査と室内整理 .....	6
1. 野外調査 .....	6
2. 室内整理 .....	8
IV 検出された遺構 .....	9
1. 土坑 .....	9
2. 陥し穴状遺構 .....	10
V 出土遺物 .....	13
1. 石器・接合剝片資料 .....	13
2. 土器 .....	14
VI おわりに .....	30
報告書抄録 .....	46

## <図版>

図1	岩手県全図と遺跡の位置	1
図2	地形分類図	3
図3	基本層序	4
図4	周辺の遺跡	5
図5	調査区と周辺の地形	7
図6	遺構配置図	7
図7	1～5号土坑	10
図8	6・7号土坑、1号陥し穴	12
図9	出土遺物（石器1）	15
図10	出土遺物（石器2）	16
図11	出土遺物（石器3）	17
図12	出土遺物（石器4）	18
図13	出土遺物（石器5）	19
図14	出土遺物（石器6）	20
図15	出土遺物（石器7）	21
図16	出土遺物（石器8）	22
図17	出土遺物（石器9）	23
図18	出土遺物（石器10）	24
図19	出土遺物（接合剥片1）	25
図20	出土遺物（接合剥片2）	26
図21	出土遺物（土器）	27

## <写真図版>

写真図版1	空中写真・作業風景	33
写真図版2	基本層序	34
写真図版3	土坑（1～4号）	35
写真図版4	土坑（5～7号）・陥し穴（1号）	36
写真図版5	出土遺物（石器1）	37
写真図版6	出土遺物（石器2）	38
写真図版7	出土遺物（石器3）	39
写真図版8	出土遺物（石器4）	40
写真図版9	出土遺物（石器5）	41
写真図版10	出土遺物（石器6）	42
写真図版11	出土遺物（石器7）	43
写真図版12	出土遺物（土器1）	44
写真図版13	出土遺物（土器2）	45

## <表>

表1	周辺の遺跡一覧	5
表2	出土遺物観察表（接合剥片）	26
表3	出土遺物観察表（石器）	28
表4	出土遺物観察表（土器）	29

## I 調査に至る経過

**安柄野遺跡**は、「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区の基盤整備（草地造成整備改良）工事」の施工に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区の基盤整備（草地造成整備改良）工事」は、御明神牧野農業協同組合の組合員畜産農家の飼料用採草地として現在利用されているが、勾配がきつく農作業上極めて危険で作業効率が悪いため、起伏修正を行いこの悪条件の改善を目的とするものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県盛岡地方振興局農政部から、平成9年9月26日付け盛地農第889号「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区施工に伴う埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」の文書によって、岩手県教育委員会に対して分布調査を依頼したのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会文化課では平成9年10月16日に分布調査を実施したが、その結果は平成9年10月20日付け教文第582号「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（回答）」で盛岡地方振興局農政部へ回答し、試掘調査を実施しなければならないことが付記された。

回答を受けた盛岡地方振興局農政部では、平成9年11月23日付け盛地農第1142号「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区施工に伴う埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」の文書で岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼し、教育委員会文化課では平成9年11月7日に試掘調査を実施した。その結果は、平成9年11月11日付け教文第655号「県営畜産經營環境整備事業奥羽北部地区実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で盛岡地方振興局農政部へ回答し、事業予定地内に埋蔵文化財が認められ、計画通りに工事を実施する場合には、事前に記録保存を目的とした発掘調査の必要性が付記された。

また、平成9年12月12日付け教文第664号「埋蔵文化財発掘事業に係る現地打ち合わせについて」の文書で、平成10年度に予定している発掘調査の現地打ち合わせを実施することとなり、平成9年12月16日に現地で県教育委員会文化課、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと盛岡地方振興局農政部が打ち合わせを行った。

実際の発掘調査は、平成10年9月1日～10月28日まで、報告書作成のための整理期間は、平成11年1月4日～3月31日までである。

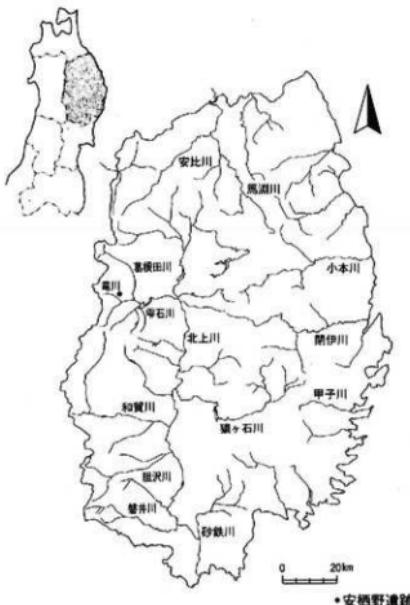


図1 岩手県全図と遺跡の位置

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の位置と地形

安柄野遺跡は、竿石町大字橋場第4地割字安柄野129番地19、(株)東日本旅客鉄道田沢湖線赤渕駅の北北西約3.3km、国道46号線から約1.8km北側にあり、竜川に注ぐ取染川と安柄沢に挟まれた山腹の南側緩斜面に立地する。遺跡の位置は、北緯39度42分33秒、東經140度53分39秒である。

竿石町は、岩手県の中西部に位置し、東側を県庁所在地の盛岡市、柴波町・滝沢村、北側を松尾村、南側を花巻市・石鳥谷町・沢内村、西側を秋田県の田沢湖町と接する。四方を奥羽山系、八幡平山系の山脈に囲まれた竿石盆地は、岩手県内最高峰の岩手山(2,039m)をはじめ、駒ヶ岳(1,637m)など1,000m以上の山を12数える。これらの山岳や斜面から成る高原が大部分を占め、標高500m以上が同町の全面積の50%にあたる。また低地平野部は、北上川の支流で竿石川水系の葛根田川・竜川・南川などに沿って、掌状に広がっている。

八幡平山系は、山頂傾斜面が発達し緩やかな起伏を示す高原状地形および平頂峰を形成する。これらは明瞭な傾斜変換線で、比較的急斜面で沢により開析された山腹斜面とに区切られる。笊森山(1,541m)から東方の三角山(1,419m)に至る山稜には、傾斜2~4°のなだらかな斜面が発達し、地表には高地性中層湿原である千沼ヶ原が広がっている。笊森山との境界は、傾斜変換線で限られ、斜面南方は本遺跡の西側を流れる安柄沢に垂れ下がる様な形態を示す。これら的事は、笊森山東斜面を溶岩流が南方に流下した事を想起させるものである。笊森山~乳頭山に至る稜線は比較的切り立っているが、東側の30~40m下位に緩斜面が幅狭く分布する。前記した三角山西の緩斜面と連なり、形態も似ている事から同一起源と考えられる。

本遺跡の所在する袖山山地は、頂が平らで南に約3~5°の傾斜で滑らかに低下する台地状地形を示し、台地上における沢や尾根も極めて滑らかな地形である。沢は起伏が15~16mであり、他地区における下刻作用の盛んなV字型の沢とは趣が異なる。御明神牧野付近では底の平らな谷があるが、下流部からの下刻作用はこの直下で止まっている。また、山津田の北の沢では地形の滑らかな谷が新たに下刻作用により切られている。これらの事実は、この台地状地形上の緩やかな谷は、下刻作用が著しくなる以前に面的浸食作用が盛んな時代の産物であり、寒冷期における周水河作用の影響を強く受けたと考えられる。

### 2. 遺跡の立地

安柄野遺跡は、前述した袖山山地の中央部やや南側の御明神牧野の南向きの緩斜面にあり、調査区は、滑らかに起伏する尾根に沿って、その中では比較的ひらけた頂部に設定された。その外側は緩やかに斜面となっている。調査区と斜面を下りきった所の比高は1~11mを測り、調査区からは擂鉢状に凹んで見える。また調査区北東部には農作業用道路が通っており、削り取られた尾根筋が3mほどの高さでむき出しになっている。遺跡の調査前の現況は牧草地で、時期ははっきりしないが以前に草地造成工事が2回行われており、現況と当時の様子は大幅に変わっていると思われる。

なお、遺跡の標高は417.5~429mで、調査区内で11m以上の比高差がある。

### 3. 基本層序

調査区内では、基本的に図3のような土層が観察される。以下、表土から順に層序を示す。

<第1層> 黒褐色土 (10YR2/3) シルト

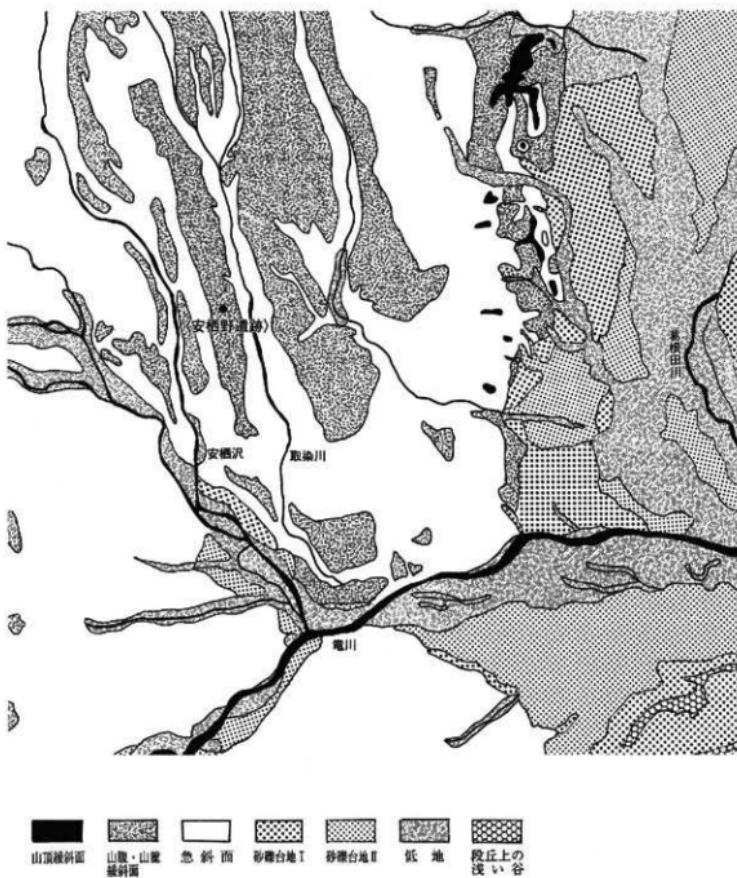


図2 地形分類図

表土。現牧草根の及ぶ部分。褐色土粒を含む。層厚10~15cm。

<第II層> 黒褐色土 (10YR2/3) シルト

小礫・褐色土小ブロック等を含む。草地造成時の整地層。層厚20~25cm。

<第III層> 褐色土 (10YR4/6) 粘土質シルト

地山。遺構後出面。オレンジ色の浮石とにびい黄褐色の極小ブロックをまばらに含む。層厚15~20cm。

<第IV層> 黄褐色土 (10YR5/6) 粘土質シルト

Ⅲ層より粒径の大きい (5~15mm) オレンジ色の浮石とにびい黄褐色極小ブロックを含む。層厚は20~30cm。

<第V層> 褐色土 (10YR4/4) 浮石層

細かいにびい黄褐色浮石とオレンジ色の浮石 (7.5YR4/6) からなり前者が主体となる。層厚20cm。

<第VI層> 赤褐色土 (5YR4/6) 浮石層

オレンジ色の浮石とにびい黄褐色浮石から成り前者が主体である。水っぽく湿った感じがある。層厚40~50cm。

<第VII層> 灰黄褐色土 (10YR4/2) 浮石層

粒径3mm程度の浮石の堆積層。オレンジ色の浮石の混入なし。層厚5cm。

<第VIII層> にびい黄褐色土 (10YR5/4) 粘土

ミルクチョコレート色の粘土層。層厚不明。

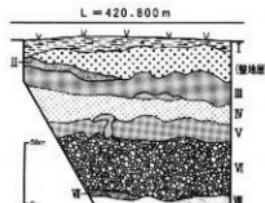


図3 基本層序

#### 4. 周辺の遺跡

岩手県文化財包蔵地一覧によると、零石町内には縄文時代から近世まで120ヶ所以上の遺跡が確認されている。図5には零石川、葛根田川および竜川流域周辺に所在する代表的な遺跡の分布を示し、表1にその内容を示した。町内の遺跡のうち、その半分以上を縄文時代の単独遺跡が占め、2割強が中世の城館跡の単独遺跡として登録されている。以下に全体の内容について記述する。

大方を占める縄文時代の遺跡では、前期末~晚期の土器および石斧が出土した高前田I~III遺跡、織維土器が出土した早~前期の集落跡の麻見田I遺跡、追光器土偶と晚期の敷石住居跡が検出された桜沼遺跡、中期の大集落で大型住居跡が検出された塙ヶ森I、II遺跡、塙ヶ森I遺跡と繋がる元御所II・下長谷地I遺跡、貝殻文土器が出土し、後期初頭の住居跡が検出された熊野橋I遺跡、貝殻文土器と早~前期の遺物が出土した野中遺跡、中期後半の複式炉を伴う竪穴住居跡が確認された広瀬II・除II遺跡、鼻曲がり土面が出土した夜明沢遺跡などが存在する。その他にも県台帳には登録されていないが、兎野遺跡では石刀が出土している。

中世の城館跡では、11世紀中頃に安倍頼良の六男重任が北浦六郎と称して居住した北浦館跡は、中野館とも呼ばれて後者を裏付けるように伝えられた。また、その西側にある御明神地区志戸前にも中の館(中野館)と呼ばれる館跡が存在する。土櫓館(滴石城)は寿永三年(1184)に尾輪の平新衡盛が一族の樋山弾上良正の跡を受けて滴石庄戸沢を領有したと伝えられ、その樋山が土櫓の名に由来する滴石城であると推測されている。また、滴石(戸沢)氏が義興元年(1340)に築城し、その後に零石(斯波)氏の居城となった零石城は俗に八幡宮と称され、現在は八幡宮が祀られ零石町内で南北朝時代の築城と推定できる唯一の城跡である。その他にも、往古戸沢上総介の據った所として“御城、地名、松之木といい、本丸高三間位、廻二百

表1 周辺の遺跡一覧



図4 周辺の遺跡

五十尺川出水無し”と居城の規模を伝えられている戸沢館跡、4つの郭を持つ複郭式でその名の通り大規模な大館跡、現在は「稻荷山」と称され太神宮社が祀られている長山館跡など、町内では25ヶ所以上の館跡が確認されている。

その他の時代の単独遺跡としては、弥生時代では墳墓が確認された八卦堂遺跡がある。その時代の土器は蘿野・七ツ森・松の木・新里遺跡で確認されているが、住居跡などの遺構が確認された遺跡は少ない。古代では仁沢瀬Ⅲ・町場Ⅲ、ロクロ使用の土師器が出土した東町遺跡、奈良時代の大集落と思われる西安庭Ⅱ遺跡などが確認されている。また、近世では高前田一里塚、昭和44年に県指定史跡となった七ツ森一里塚などが存在する。

一方、複合遺跡としては、縄文と弥生時代が複合する伝久遺跡があり、弥生時代の竪穴状遺構が検出されている。縄文と古墳時代では高前田古墳群が存在する。縄文と奈良・平安時代では、早期～中期の土器や鐵雄土器、石鏡および稚松压痕のついた土師器が出土した小日谷地ⅠA～IV遺跡、縄文時代中期の土器と土師器を出土した八卦Ⅰ遺跡、晩期の土器と土師器を出土した名子Ⅱ遺跡、早期末～前期の土器と土師器および零石川上流域では出土例の少ない須恵器が出土している塙ヶ森V、VI遺跡、中期の土器と土師器が出土した集落跡の仁沢瀬Ⅱ、IV遺跡、中期末の住居跡と早～晩期までの多量の遺物と土師器を出土した桜松遺跡、独鉛石と土師器が出土した天沼遺跡、縄文土器とロクロ不使用の土師器が出土した板橋Ⅱ遺跡、早～後期の土器と土師器が出土した下長谷地Ⅱ・町場Ⅳ遺跡などがある。縄文と中世では、北浦六郎の館で、長山氏も使用したと言われている柿木館、石槍が出土した田屋館跡、高見館・和野館・源太堂館の3遺跡では館跡として登録されているが縄文土器も出土している。下平遺跡では、18基が並んで検出された陥し穴状遺構と中世の竪穴住居跡が検出されている。

#### 引用・参考文献

- 琴石町教育委員会 (1979) : 『琴石町史』  
松野恒夫・工藤利幸・高橋與右衛門ほか (1980) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第13集(財)岩埋文  
金沢光孝 (1981) : 『琴石町 下平遺跡 高校西遺跡』岩埋文報告書第14集(財)岩埋文  
高橋與右衛門・上野徳ほか (1982) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第16集(財)岩埋文  
本沢信輔・松野恒夫 (1982) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第28集(財)岩埋文  
松野恒夫 (1982) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第30集(財)岩埋文  
本沢信輔・松野恒夫 (1982) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第31集(財)岩埋文  
経済企画庁統合開発局国土調査課 (1973) : 『土地分類本調査 地形・表層地質・土じょう 琴石』

## III 野外調査と室内整理

### 1. 野外調査

#### (1) 調査区の設定

調査では、便宜上図6のように調査区をA区からD区の4つに分け、公共座標第X系を利用してそれぞれ地区割りを行った。まず、B区の東西方向に2点の基準点を設定し、それを基にグリッドを区画した。基準点1・2の成果値は以下のとおりである。

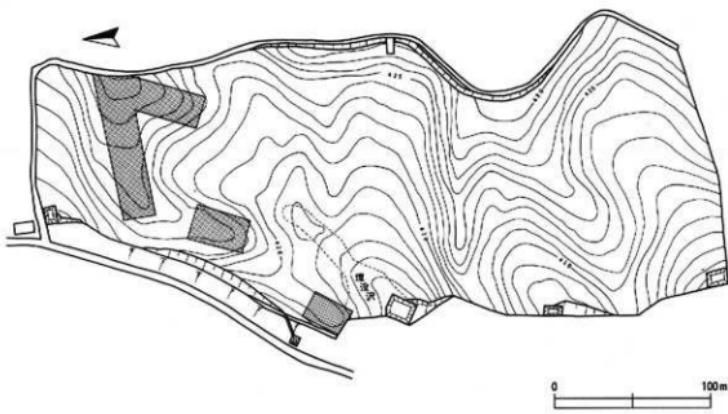


図5 調査区と周辺の地形

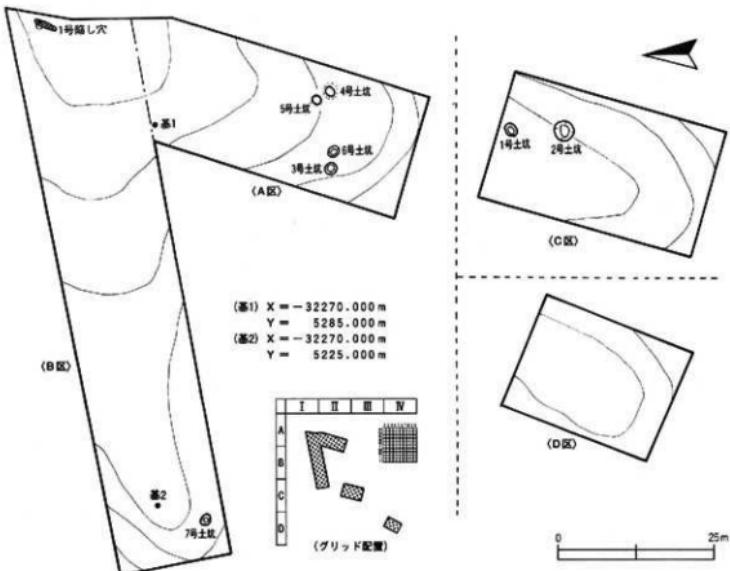


図6 遺構配図

基準点1 X = -32270.000m Y = 5285.000m H = 420.300m

基準点2 X = -32270.000m Y = 5225.000m H = 417.758m

またこの他に、A区内に1点、C区・D区内に各2点の計5点の補点を設置しているが成果値は省略する。グリッドは、起点を北東隅に置き、北から南方向にローマ数字のI・II・III……、東から西方向にアルファベットのA・B・C……を付し50mの大グリッドとした。さらに5×5mの小グリッドを設定し、南北方向に1～0まで、東西方向にa～jを与え、その組み合わせによってグリッド名とした。(IA1a区等)

#### (2) 試掘・遺構検出

調査はまず牧草の除去後に、文化課が実施した試掘結果の確認のため、試掘坑のクリーニングを行った。その後、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で、2m幅のトレンチを各区に数本ずつ設定した。表土および遺物の包含されない整地層の除去には重機を使用した。

遺構の検出は、整地層下の第Ⅲ層でのみ行った。部分的にこのⅢ層も掘り下げた部分もあるが、遺構の検出のためではない。

#### (3) 遺構名の付け方

検出された遺構は、その属するグリッド名を付け「IA1a上坑」などのように呼称したが、室内整理の段階で「第1号土坑」などとすべて遺構名を付け替えている。

#### (4) 精査・実測

土坑・陥落穴状遺構とも2分法で精査し、実測は簡易造り方で行った。遺構の平・断面図は、20分の1の縮尺で実測した。

#### (5) 写真撮影

野外での写真撮影は、35mm版2台(モノクローム・カラーリバーサル1台ずつ)と6×7cm版モノクロームを使用した。また、必要に応じてポラロイドカメラも使用した。調査終了前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

## 2. 室内整理

#### (1) 遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、実測後トレース・写真撮影を行いそれぞれ図版を作成した。

#### (2) 遺構図面

野外調査の図面類は、標高の確認・平面断面図の点検をし、必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

#### (3) 図版について

遺物図版の縮尺は、土器実測図・拓影図とも3分の1、剥片石器3分の2、礫石器3分の1、接合剥片2分の1である。各図版内にはそれぞれスケールを付している。

遺構図版は、遺構の種類毎に掲載した。縮尺はいずれも40分の1である。

#### (4) 遺物写真図版について

遺物写真図版の縮尺は、図版のそれに準じているが、一部土器にそれに合わないものがある。なお、石器の接合剥片資料については、写真を割愛した。

## IV 検出された遺構

### 1. 土坑

#### 1号土坑（図7、写真図版3）

＜位置＞調査区C区、II C 8 e区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径92×104cm、底部径81×97cm。ほとんど削平されており、本来の深さは不明である。不整円形を呈する。

＜埋土＞オレンジ色の浮石（以下浮石と略す。）をまばらに含む暗褐色粘土質シルト。

＜底面＞削平されているため底面のみ残存していた。副穴を東側に2個、西側に1個有する。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 2号土坑（図7、写真図版3）

＜位置＞調査区C区、II C 0 e区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層上面。

＜規模・平面形＞開口部径198×190cm、底部径118×134cm、深さ60cmの円形を呈する。

＜埋土＞浮石をまばらに含む黒褐色粘土質シルトが主体で、東側の壁際に暗褐色シルト、西側の壁際に褐色のⅣ層地山崩落土が堆積する。

＜底面＞平坦で四隅にそれぞれ1個ずつ、計4個副穴を有する。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞副穴はや内側を向いており、上屋を持つ貯蔵施設か、隠し穴の可能性があるが、判断できなかったため、土坑として扱った。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 3号土坑（図7、写真図版3）

＜位置＞調査区A区、II B 6 b区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径107×107cm、底部径95×91cm、深さ19cmの不整円形を呈する。

＜埋土＞浮石と炭化物を含む黒褐色シルト主体で、底部から壁際にかけて褐色シルトが堆積し、全体にⅢ層崩落ブロックを含む。

＜底面＞ほぼ平坦である。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞上部はかなり削平されている。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 4号土坑（図7、写真図版3）

＜位置＞調査区A区、II A 6 j区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径103×92cm、底部径123×113cm、深さ57cmの楕円形を呈する。

＜埋土＞浮石と褐色土粒を含む黒褐色シルトが主体で、底面から西側壁際にかけて暗褐色粘土質シルトが堆積する。

＜底面＞ほぼ平坦である。

＜出土遺物＞出土していない。

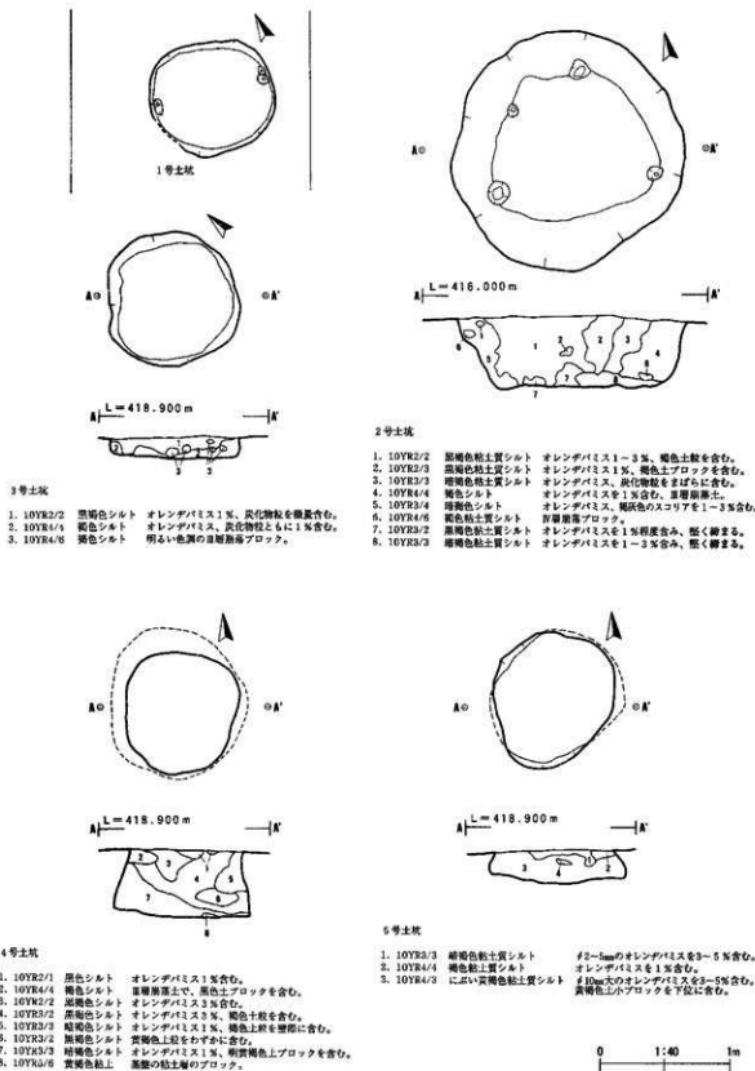


図7 1~5号土坑

＜その他＞上部が削平されたプラスコ形土坑と判断される。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 5号土坑（図7、写真図版4）

＜位置＞調査区A区、II A 6 j区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径98×113cm、底部径112×110cm、深さ29cmの楕円形を呈する。

＜埋土＞浮石と黄褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトが主体で、上位に暗褐色と褐色の粘土質シルトが混入する。

＜底面＞緩やかに波打つ。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞4号土坑と同様、上部に削平を受けたプラスコ形の土坑である。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 6号土坑（図8、写真図版4）

＜位置＞調査区A区、II B 6 a区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径89×90cm、底部径72×70cm、深さ20cmの円形を呈する。

＜埋土＞浮石と炭化物を含む暗褐色シルトが主体で、西側壁際にⅣ層崩落ブロックを含む。

＜底面＞緩やかに波打ち、中央部が高い。北西側と西側の壁際に副穴を1個ずつ、計2個有する。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

#### 7号土坑（図8、写真図版4）

＜位置＞調査区B区、II C 1 b区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層上面。

＜規模・平面形＞開口部径124×120cm、底部径93×96cm、深さ36cmの隅丸方形状を呈する。

＜埋土＞褐色土粒をまばらに含む黒褐色シルトが主体で、底部から壁際にかけてⅢ層崩落ブロックが堆積する。

＜底面＞ほぼ平坦で、南東側壁際に副穴を1個有する。

＜出土遺物＞細部加工剥片（遺物番号41、図版15、写真図版9）が出土している。

＜時期＞出土状況・出土遺物から縄文時代に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

## 2. 陷し穴

#### 1号陷し穴（図8、写真図版4）

＜位置＞調査区B区、I A 7 g区にある。 ＜検出面＞第Ⅲ層上面。

＜規模・平面形＞開口部径342×99cm、底部径321×8cm、深さ71~86cmの溝状を呈する。

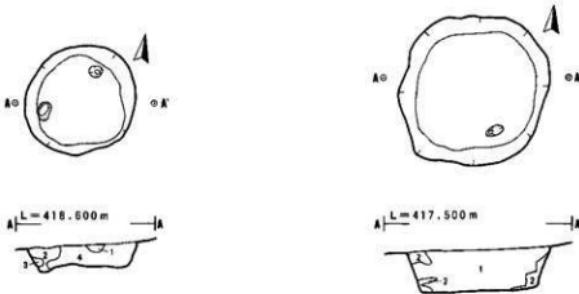
＜埋土＞浮石を含む暗褐色およびにぶい黄褐色粘土質シルトの混合土が主体で、Ⅲ層およびⅣ層崩落土小ブロックが混入する。

＜底面＞緩やかに波打ち、東側はさらに一段5cmほど下がる。逆茂木痕は検出されていない。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞中央部西側の半円形の張り出しが、埋土の堆積状況から、擾乱されたものではなく、壁の崩落と考えられる。

＜時期＞縄文時代に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

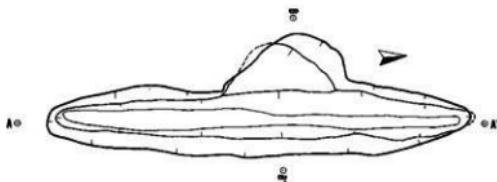


6号土坑

1. 10YR2/2 黄褐色シルト 細粒土を含む。
2. 10YR4/6 黄褐色シルト オレンジバニスを微量含む。
3. 10YR4/6 黄褐色シルト 鉱物結晶ブロック。
4. 10YR3/3 黄褐色シルト 黄褐色小ブロック、オレンジバニス、炭化物粉をまばらに含む。

7号土坑

1. 10YR2/5 暗褐色シルト 黄褐色土粒をまばらに含む。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 鉱物結晶ブロック。



1号陥し穴

1. 10YR2/1 黄色シルト 枝子の細かいオレンジバニスを含む。
2. 10YR2/3 黄褐色シルト 黄色ナイトロット及び暗褐色土質オレンジバニスを含む。
3. 10YR2/3 黄褐色シルト 黄褐色土粒をまばらに含む。
4. 10YR4/6 黄褐色粘土質シルト 鉱物結晶ブロック。
5. 10YR3/3 黄褐色粘土質シルト 黄褐色小ブロック、オレンジバニスを含む。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 黄褐色小ブロックをまばらに含む。
7. 10YR4/3 黄褐色粘土質シルト 黄褐色及びN層の青褐色土小ブロック。
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト オレンジバニスをまばらに含む。
9. 10YR3/2 黄褐色シルト 黄褐色土粒をまばらに含む。

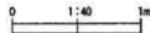


図8 6・7号土坑, 1号陥し穴

## V 出土遺物

### 1. 石器・接合剥片資料（図9～20、写真図版5～11）

今回の調査で出土した石器は、中コンテナ（42×32×20cm）3箱弱である。ほとんどのものが第II層の整地層中から出土した。すべて縄文時代の遺物と思われる。剥片石器類は、このうち1箱ほどであるが、製品が少なく（全点で41点）二次加工されない剥片類がほとんどである。これらの剥片の接合作業を試みたところ、7点の接合剥片資料が得られた。しかし、4点接合したもののが最高で、他は3点以下と資料的にはあまり芳しいものではない。その中から3点の接合剥片資料を掲載した。製品では、木葉形の尖頭器や石刃様の綫長剥片など、比較的古手と思われるものが見られる。礫石器では凹石の出土が目立ち（21点）、他には磨石3点と半円状扁平石器が1点出土している。以下、器種毎に記述する。

剥片石器は、1・2は石礫で、1は平基無茎礫、2は基部を欠くもので、断面形状を見ると石礫としたのは不適切だったかもしれない。3～5は尖頭器とした。いずれも木葉形を呈している。3は比較的小ぶりなもの。4はそれぞれ別地点から出土した2点が接合した大型の木葉形尖頭器である。この下半分は、尾根から下がる斜面部で表土下の暗褐色土中から出土した。5は全体が弓なりに湾曲するもので、半月形に近い形状である。片面の調整は、全周せず1側縁に留まる。3～5の時期については、縄文時代の古手のものとしておきたい。6～9はいずれも綫型の石匙で、8・9は下半分を欠いている。10～16は塊状石器とした。刃部に向けて大きく幅が広がる台形状の10・15、幅がほぼ同じまま刃部に至る長方形状の11～13の大きく2種に分けられる。14・16は梢円形に近い形状と思われるが欠損部が多く不明である。17は刃部を欠くが打製石斧とした。塊状石器になる可能性もある。18～31は不定形石器で登録したもので、搔器・削器類と思われるものを一括した。18は梢円形の素材の縁辺に二次加工を有するが使用痕である可能性がある。19は残核としたほうが適切だろうと思われる。21～28は綫長の素材の1ないし2側縁に二次加工が施されているもので、29～31も同様であるが二次加工かどうかが明瞭でない。32・33の2点は石刃様の綫長剥片としたもので、32のみ一部自然面を残す。ともに両側縁の一部に使用痕が観察される。この2点については所属する時期が問題になると思われるが、縄文時代を遡るものとは考えていない。34～38は使用痕の認められる剥片である。34は綫長の素材を用いているが、両側縁が平行しておらずここに含めた。39は黒色頁岩製の石核、40は赤色頁岩の剥片である。41は第7号土坑から出土した細部加工を有する剥片で、これが唯一の遺構内出土遺物である。

礫石器では、42～44は磨石で、44は3面に磨面を有している。45はいわゆる半円状偏平石器で、使われた面は平滑で光沢を帯びている。46～66は凹石である。用いられている礫は安山岩がほとんどで、形状は円形・梢円形・方形・長方形などがある。大きさは10cm前後のものが多い。凹部分は、深いと小さく（54など）浅いと大きく幅がある（65など）傾向が認められる。

接合剥片資料は3点掲載（図19・20）しているが、接合剥片1・2・3と呼び、それぞれ接合状態の実測図とそれをばらした個々の図を示した。観察表は図19下に3点分まとめて掲載した。なお、これらの写真撮影は行っていない。

接合剥片1は、節理面を残す剥片4点の接合資料である。石質は頁岩で、節理面は褐色、それ以外は褐灰色を呈している。原礫を推定するに至らない。接合剥片2は、礫皮面は褐色、内面にはぶい黄褐色を呈する頁岩の資料で、自然面を残す剥片3点が部分的に接合した。いずれの剥片剥離も同一打面上（自然面）で行われている。接合剥片3は、礫皮面を残さない頁岩製のもので2点接合した。だいぶ剥片剥取の進んだ段階

で折れている。色調は灰黄褐色を呈している。

これらは、零石町桜松遺跡や旧和賀町（現北上市）石曾根遺跡の接合資料のように、資料点数やそれぞれ接合した剝片の数も少なく、またその出土状況から、詳細な時期を想定するのは困難である。一応縄文時代に属するものとしておく。

## 2. 土器（図21、写真図版12・13）

出土した土器の総量は、中コンテナ1箱と極端に少ない。これらはすべて、整地層中から出土したものである。縄文時代早期・前期前葉・中期中葉・晚期末葉の時期のものが見られる。67～89の23点を掲載した。土器の観察結果は表3に示したとおりであるが、ここで若干それについて触れる。

67は櫛歯状の条痕と判断し早期としたが、砂粒を多く含む胎土に多少違和感がある。68はいわゆる乳房状の尖底部を持つもので、胎土には植物纖維を含み難い。以下78までが植物纖維を含むもので、地文に羽状縄文・単節・複節等が施文される。73の地文は一見組縄のようにも見える。これらは前期初頭～前葉に属するものと思われる。79の口縁部は緩い波状口縁で、頸部には浅い平行沈線を有する。中期中葉～後葉期のものか。80～85は晩期に属するものである。80は大洞C1式相当と思われる変形土器の肩部破片。81～83は頸部に沈線が施されているが、詳細な時期は不明である。84は変形工字文（弘前市砂沢遺跡変形工字文類型IV型-1）を有する浅鉢である。沈線は深く明瞭で、内面脣部上半の一部にはコゲが付着している。85は84とほぼ同時期（3条の沈線が單位毎に組み合わないことからA式か？）と思われる小型の鉢である。刻みのある突起を有する口唇部にも単節縄文が施されている。

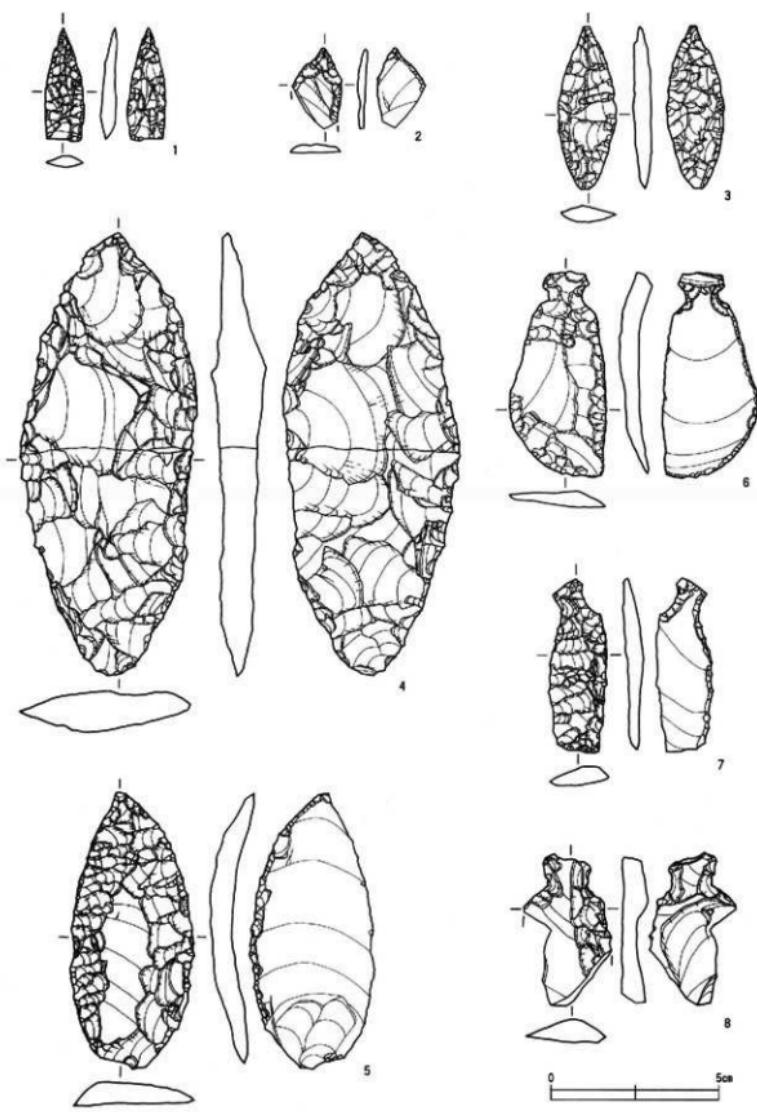


図9 出土遺物（石器1）

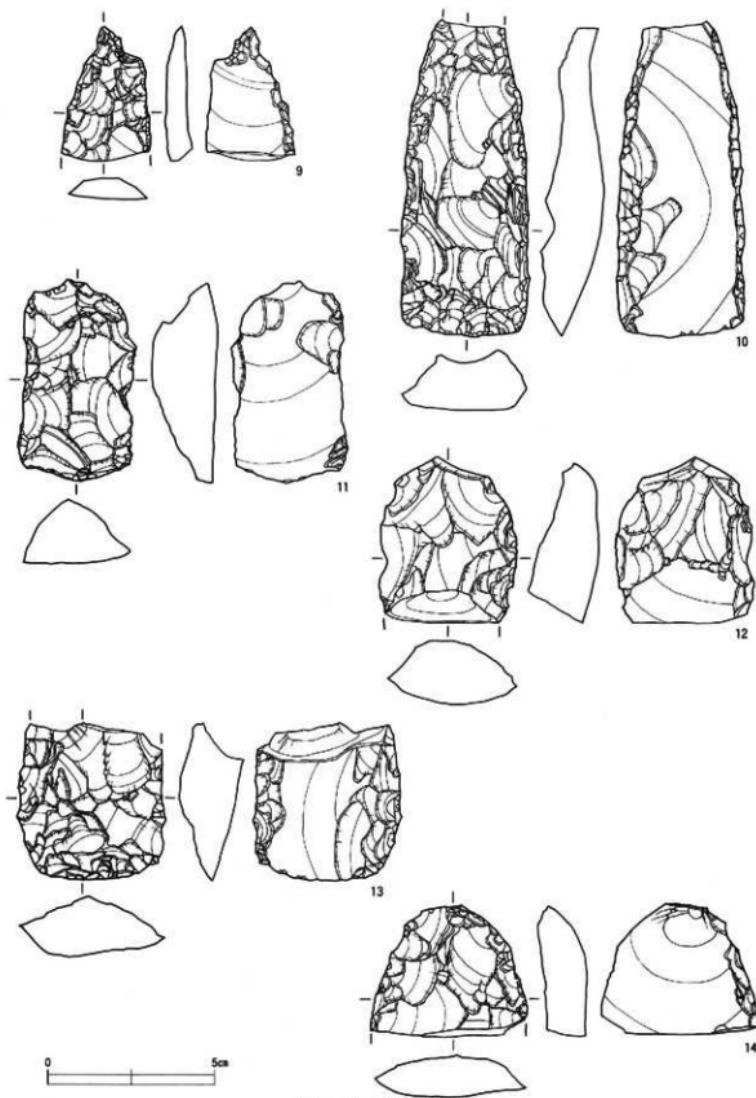


図10 出土遺物（石器2）

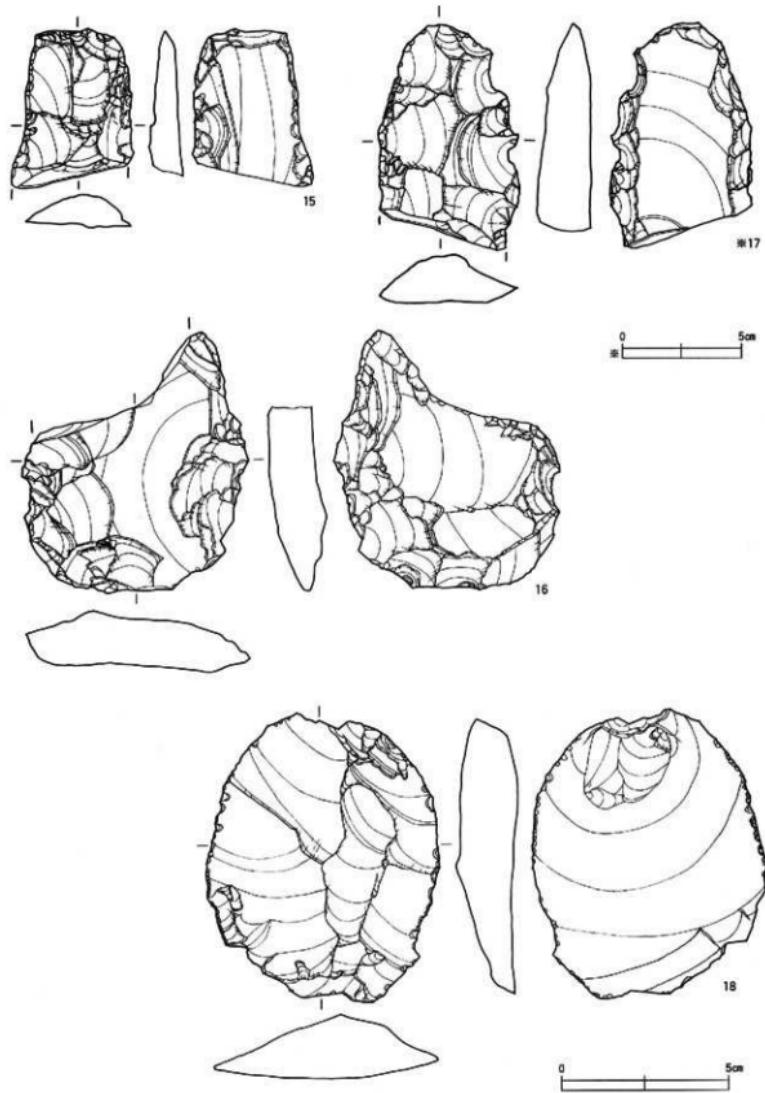


図11 出土遺物（石器3）

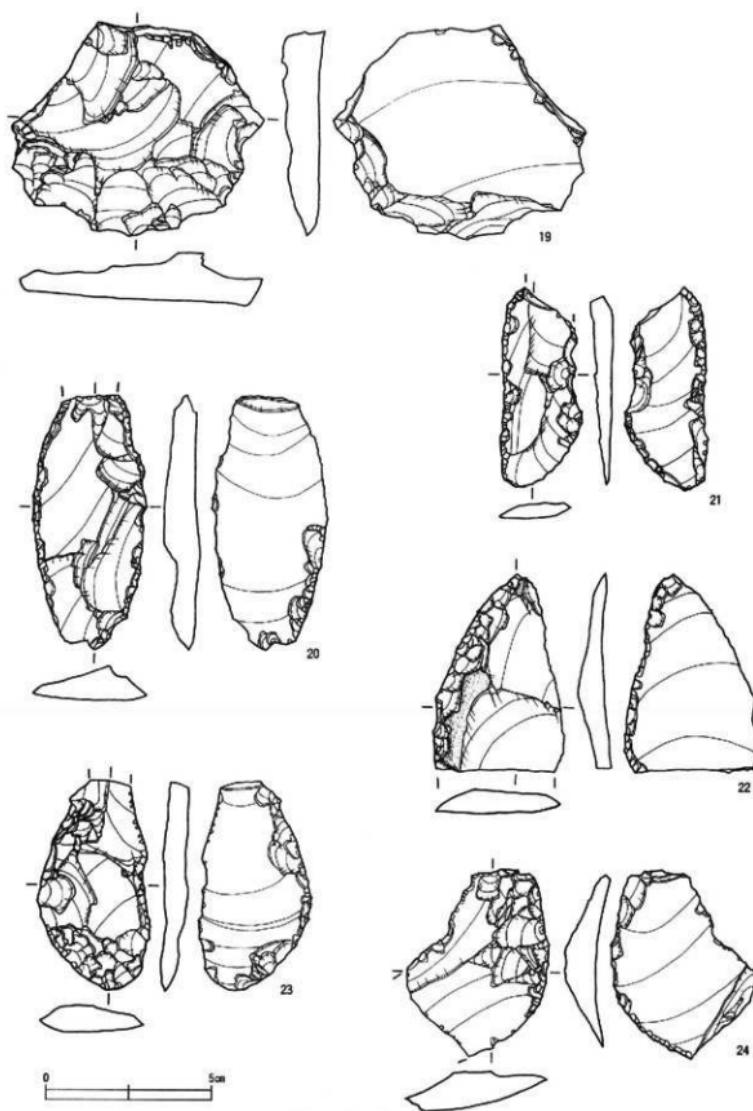


図12 出土遺物（石器4）

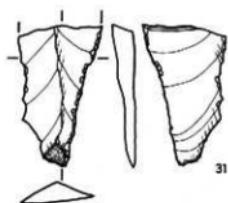
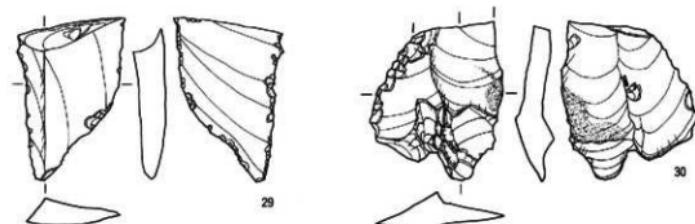
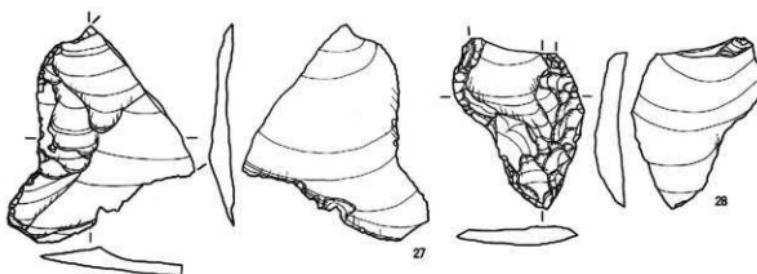
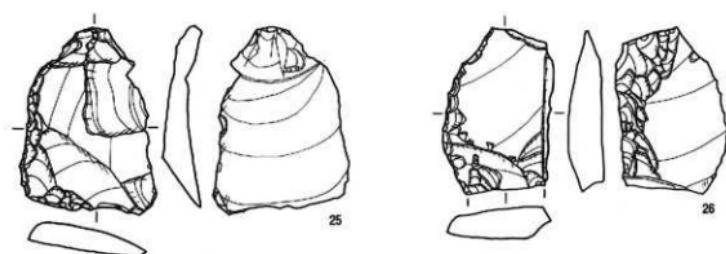


図13 出土遺物（石器5）

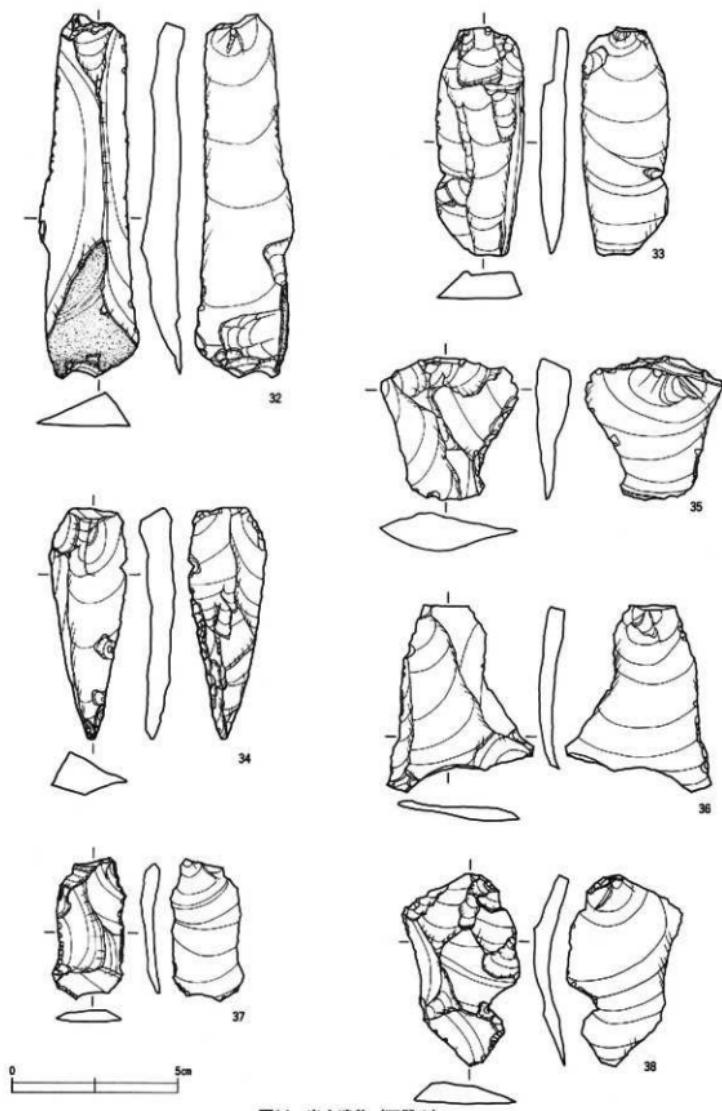


图14 出土遗物(石器6)

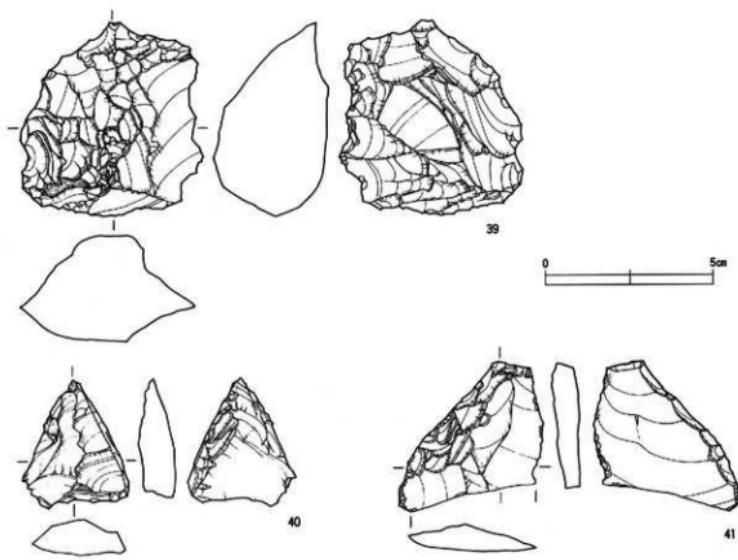


図15 出土遺物（石器7）

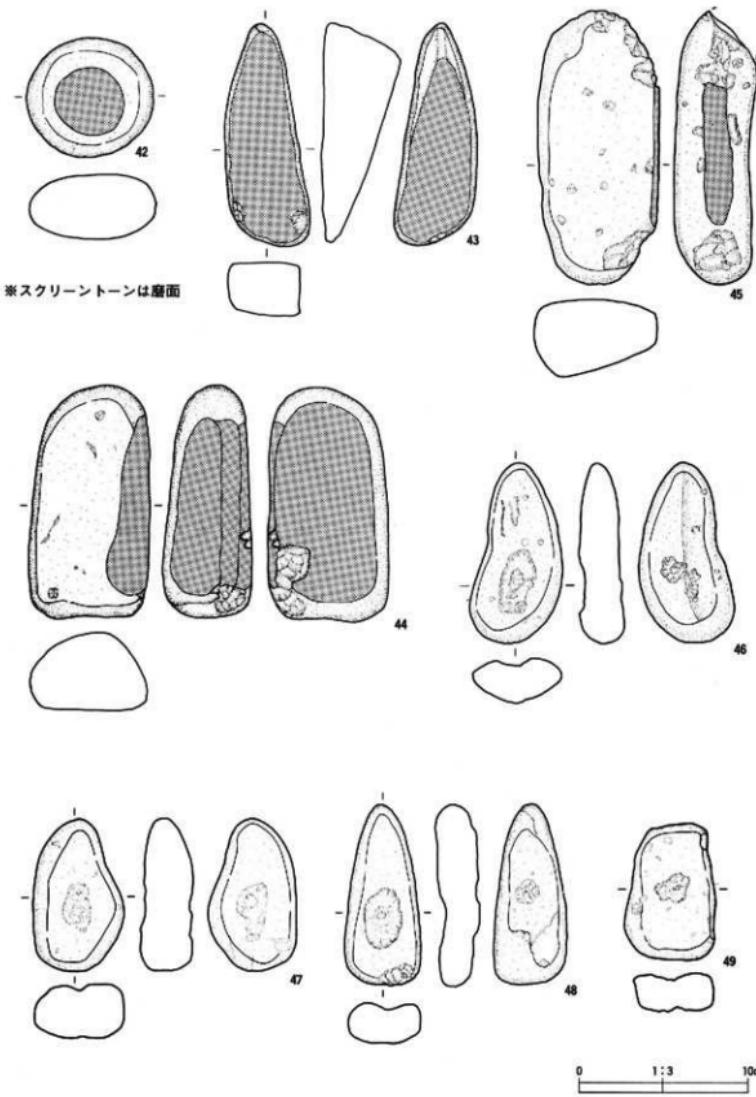


図16 出土遺物（石器 8）



図17 出土遺物（石器 9）

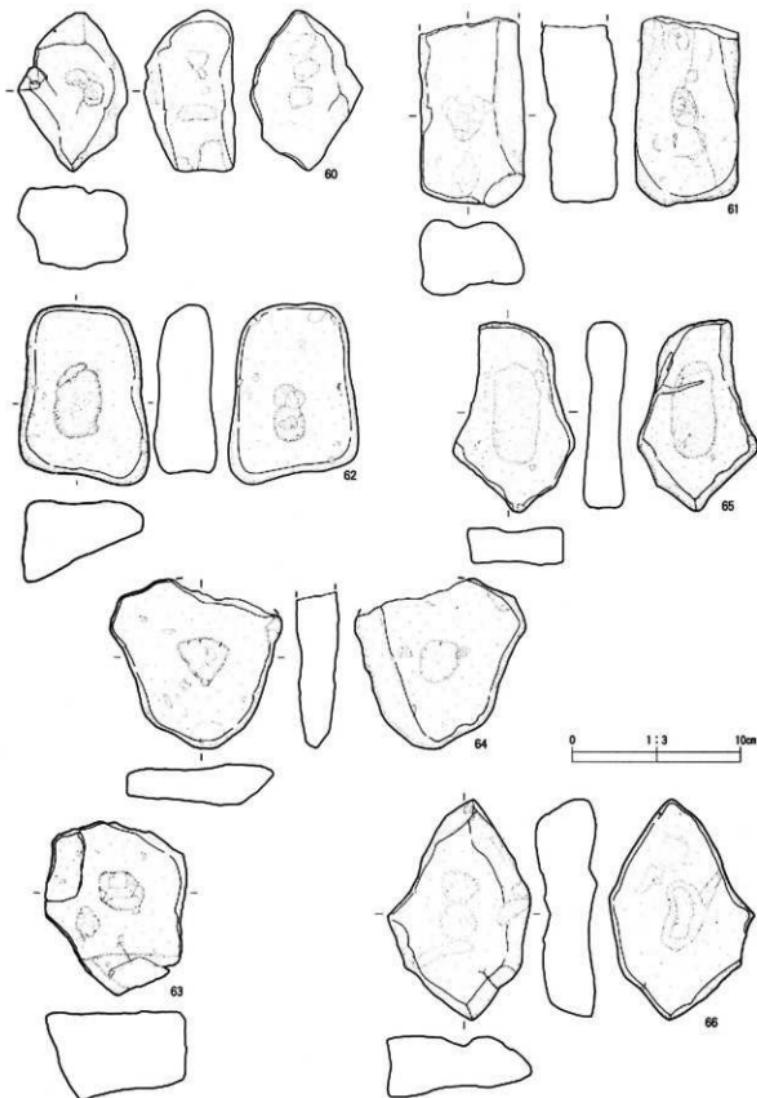


図18 出土遺物 (石器10)

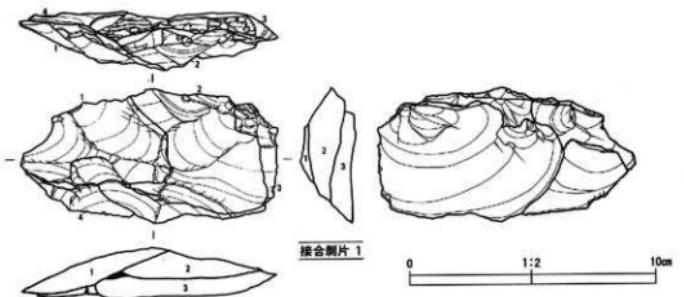


図19 出土遺物（接合剖片1）

表2 出土遺物観察表（接合剖片）

番号	種類	グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
接1-1	剥片	I C 9 a	II層(整地層)	3.7	6.4	1.1	17.8	頁岩	図19
接1-2	剥片	I C 9 a	II層(整地層)	5.0	6.2	1.6	34.0	頁岩	タ
接1-3	剥片	I C 9 a	II層(整地層)	5.0	7.5	0.9	41.9	頁岩	タ
接1-4	剥片	I C 9 a	II層(整地層)	3.2	4.2	0.7	3.8	頁岩	タ
接2-1	剥片	II C 1 b	II層(整地層)	4.2	4.6	1.7	28.0	頁岩	図20
接2-2	剥片	II C 0 b	II層(整地層)	5.5	4.0	1.4	24.6	頁岩	タ
接2-3	剥片	II C 1 c	II層(整地層)	4.6	3.4	1.4	17.4	頁岩	タ
接3-1	剥片	I A 8 i	II層(整地層)	4.5	5.7	1.4	23.0	頁岩	タ
接3-2	剥片	I A 8 i	II層(整地層)	6.6	7.6	1.7	93.7	頁岩	タ

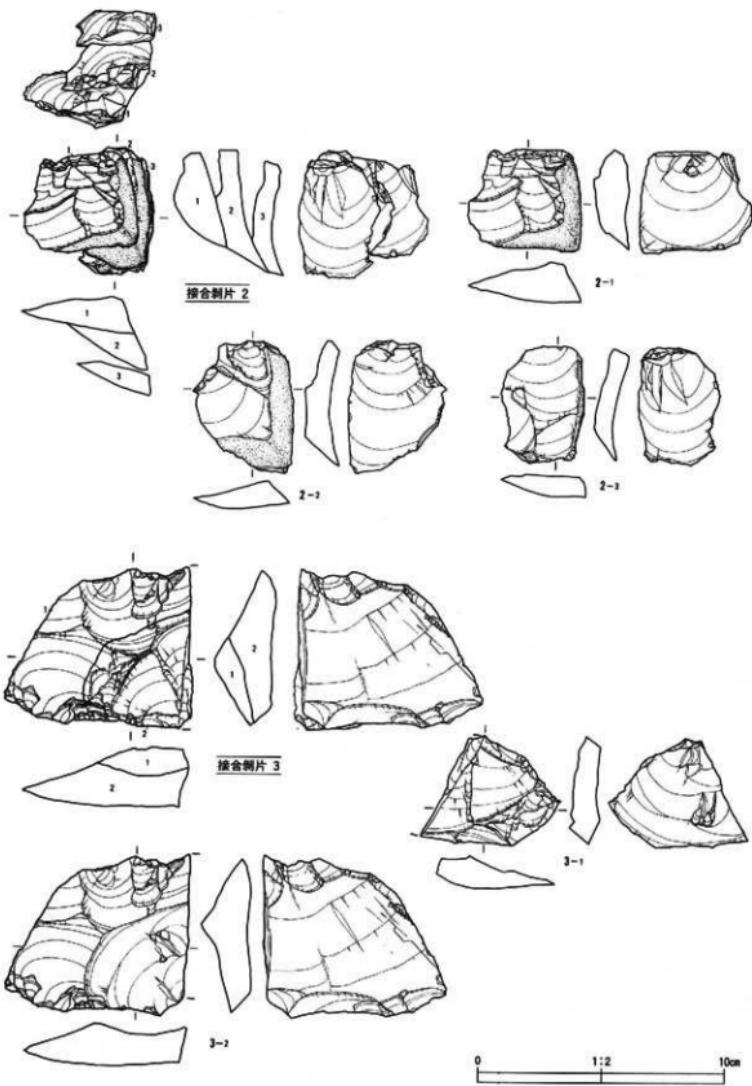


图20 出土遗物（接合铜片 2）

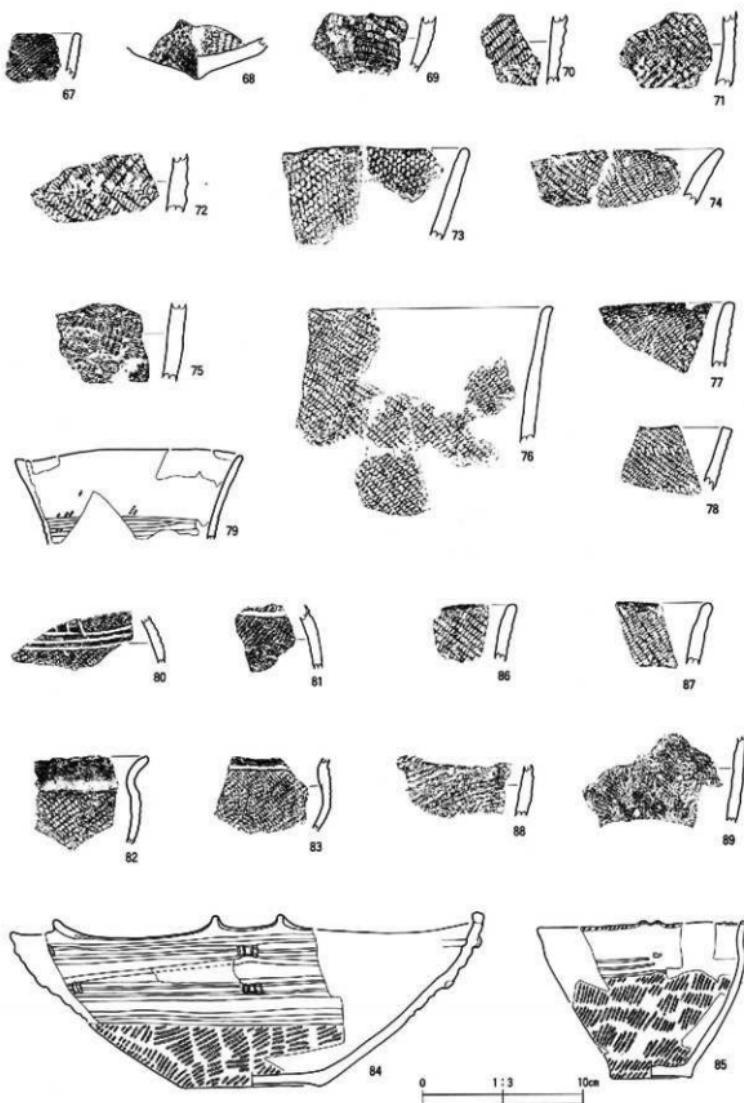


図21 出土遺物

表3 出土遺物観察表（石器）

番号	器種	出土地点・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	産地	図版	写真 図版
1	石鎌	I A9 i II層(整地層)	3.5	1.1	0.5	1.4	頁岩	北上山地	9	5
2	石鎌	IV D5 f II層(整地層)	1.9	1.5	0.3	(1.0)	頁岩	北上山地	9	5
3	尖頭器	IV D4 f II層(整地層)	5.0	1.8	0.6	3.6	頁岩	北上山地	9	5
4	尖頭器	ND4d-ND3e II層(整地層)	13.6	5.4	1.7	96.1	頁岩	北上山地	9	5
5	尖頭器	I A8 h II層(整地層)	8.4	3.8	1.3	28.7	頁岩	北上山地	9	5
6	石匙	III C2 g II層(整地層)	6.3	2.9	1.0	11.3	頁岩	北上山地	9	5
7	石匙	I C9 b II層(整地層)	5.1	1.7	0.6	5.7	頁岩	北上山地	9	5
8	石匙	IV D2 f II層(整地層)	4.7	2.1	0.8	7.6	頁岩	北上山地	9	5
9	石匙	IV D5 h II層(整地層)	4.1	2.7	0.7	(7.3)	頁岩	北上山地	10	5
10	範状石器	地点層位不明	9.7	3.9	1.9	(67.3)	頁岩	北上山地	10	5
11	範状石器	IV D6 g II層(整地層)	6.2	3.6	2.0	38.9	頁岩	北上山地	10	5
12	範状石器	I C0 a II層(整地層)	5.1	4.1	2.2	(39.0)	頁岩	北上山地	10	6
13	範状石器	II C1 d II層(整地層)	4.8	4.5	1.9	(37.7)	頁岩	北上山地	10	6
14	範状石器	I B0 i II層(整地層)	4.0	4.7	1.5	(26.9)	頁岩	北上山地	10	6
15	範状石器	IV D3 e II層(整地層)	4.9	3.7	1.0	(18.2)	頁岩	北上山地	11	6
16	範状石器	IV D5 g II層(整地層)	7.9	6.9	1.9	(92.8)	頁岩	北上山地	11	6
17	打製石斧	I A8 i II層(整地層)	10.3	6.4	2.5	(151.0)	頁岩	北上山地	11	6
18	不定形石器	D区 表面採集	8.8	7.1	1.9	104.5	頁岩	北上山地	11	7
19	不定形石器	I A9 i II層(整地層)	6.5	7.7	1.6	67.7	頁岩	北上山地	12	7
20	不定形石器	III C2 g II層(整地層)	7.8	3.5	1.0	(24.2)	頁岩	北上山地	12	7
21	不定形石器	IV D4 f II層(整地層)	6.1	2.5	0.7	(8.0)	頁岩	北上山地	12	7
22	不定形石器	IV D3 f II層(整地層)	6.1	4.0	1.0	(18.6)	頁岩	北上山地	12	7
23	不定形石器	I C0 b II層(整地層)	6.4	3.5	0.8	(18.7)	頁岩	北上山地	12	7
24	不定形石器	IV D5 f II層(整地層)	5.8	4.4	1.4	(20.9)	頁岩	北上山地	12	7
25	不定形石器	I B0 a II層(整地層)	5.7	4.1	1.3	22.6	頁岩	北上山地	13	7
26	不定形石器	IV D4 g II層(整地層)	5.1	3.4	1.1	(18.7)	頁岩	北上山地	13	8
27	不定形石器	III C2 g II層(整地層)	6.6	5.7	0.9	(16.4)	頁岩	北上山地	13	8
28	不定形石器	IV D4 e II層(整地層)	5.3	4.0	1.0	(13.7)	頁岩	北上山地	13	8
29	不定形石器	IV D5 f II層(整地層)	4.9	3.3	1.0	(10.9)	頁岩	北上山地	13	8
30	不定形石器	IV D6 g II層(整地層)	4.9	4.1	1.2	(16.1)	頁岩	北上山地	13	8
31	不定形石器	III C2 g II層(整地層)	4.3	2.5	0.6	(4.5)	頁岩	北上山地	13	8
32	縦長剣片	文化課トレーナー 整地層	11.2	3.0	1.3	31.1	頁岩	北上山地	14	8
33	縦長剣片	I A9 i II層(整地層)	7.0	2.7	0.8	18.1	頁岩	北上山地	14	8
34	フレーク(使用痕有)	III C2 g II層(整地層)	7.1	2.9	1.3	14.8	頁岩	北上山地	14	8
35	フレーク(使用痕有)	I A8 i II層(整地層)	4.4	4.2	1.2	14.6	頁岩	北上山地	14	8
36	フレーク(使用痕有)	I C0 a II層(整地層)	5.7	4.4	0.7	10.4	頁岩	北上山地	14	8
37	フレーク(使用痕有)	IV D2 f II層(整地層)	4.3	2.2	0.5	4.4	頁岩	北上山地	14	9
38	フレーク(使用痕有)	IV D3 f II層(整地層)	5.9	3.6	1.0	11.2	頁岩	北上山地	14	9
39	核	地点・層位不明	5.9	5.6	3.5	93.8	頁岩	北上山地	15	9
40	フレーク	文化課トレーナー 整地層	4.0	3.3	1.1	11.1	赤色頁岩(繊状)	北上山地	15	9
41	細部加工剣片	7号土坑 墓土中位	4.5	4.4	0.9	(13.4)	頁岩	北上山地	15	9
42	磨石	II C1 b II層(整地層)	7.5	7.3	3.9	292.3	砂岩	不明	16	9
43	磨石	C区 表面採集	13.3	4.7	4.8	324.1	安山岩	奥羽山脈	16	9
44	磨石	IV D3 f II層(整地層)	14.3	7.3	4.8	845.3	安山岩	奥羽山脈	16	9
45	半円状偏平石器	IV D3 f II層(整地層)	16.7	7.5	4.6	826.0	石英安山岩	奥羽山脈	16	9
46	凹石	文化課トレーナー 整地層	11.0	5.5	2.4	182.1	安山岩	奥羽山脈	16	9
47	凹石	III C2 g II層(整地層)	9.3	5.6	3.3	228.6	安山岩	奥羽山脈	16	9
48	凹石	II C1 c II層(整地層)	11.1	4.6	2.5	181.0	安山岩	奥羽山脈	16	10

49	凹石	IV D3 f II層(整地層)	8.3	5.4	2.3	142.4	浮石質凝灰岩	奥羽山脈	16	10
50	凹石	IV D2 e II層(整地層)	9.6	6.3	3.1	238.1	安山岩	奥羽山脈	17	10
51	凹石	D区 表面採集	11.3	8.2	3.3	343.3	安山岩	奥羽山脈	17	10
52	凹石	III C2 f II層(整地層)	12.1	6.8	3.6	387.2	安山岩	奥羽山脈	17	10
53	凹石	I C1 c II層(整地層)	10.8	6.5	3.7	296.0	安山岩	奥羽山脈	17	10
54	凹石	I C0 g II層(整地層)	8.6	7.2	4.0	304.6	安山岩	奥羽山脈	17	10
55	凹石	I C0 a II層(整地層)	10.0	8.7	5.7	327.4	安山岩	奥羽山脈	17	10
56	凹石	II C1 a II層(整地層)	7.1	5.2	4.0	270.2	安山岩	奥羽山脈	17	10
57	凹石	B区 表面採集	6.6	5.5	3.7	217.1	安山岩	奥羽山脈	17	10
58	凹石	D区 表面採集	7.7	5.1	4.5	371.4	安山岩	奥羽山脈	17	10
59	凹石	II C1 b II層(整地層)	9.1	6.5	3.6	(267.0)	安山岩	奥羽山脈	17	10
60	凹石	B区 表面採集	9.7	6.7	5.1	364.1	安山岩	奥羽山脈	18	10
61	凹石	I B9 c II層(整地層)	11.6	6.2	4.6	(461.4)	安山岩	奥羽山脈	18	10
62	凹石	I C0 a II層(整地層)	10.6	7.8	4.9	538.0	安山岩	奥羽山脈	18	11
63	凹石	D区 表面採集	10.7	8.6	5.8	630.5	安山岩	奥羽山脈	18	11
64	凹石	IV D2 e II層(整地層)	10.4	10.5	2.5	(310.9)	安山岩	奥羽山脈	18	11
65	凹石	III C1 c II層(整地層)	11.5	7.5	1.8	265.9	安山岩	奥羽山脈	18	11
66	凹石	IV D3 f II層(整地層)	13.5	8.7	3.5	457.5	安山岩	奥羽山脈	18	11

表4 出土遺物観察表（土器）

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	時期	図版	写真図版
67	IV D 5 h 区・整地層	深鉢	口縁部	無筋 L ?, 條齒（条痕？）	ナデ	早	21	12
68	IV D 4 d 区・整地層	深鉢	底部	尖底、羽状繩文、織維合	ナデ	前	21	12
69	IV D 5 h 区・整地層	深鉢	胴部	羽状繩文、織維合	ナデ	前	21	12
70	IV D 4 d 区・整地層	深鉢	口縁部	羽状繩文、織維合	ナデ	前	21	12
71	IV D 5 h 区・整地層	深鉢	胴部	羽状繩文、織維合	ナデ	前	21	12
72	IV D 6 f 区・整地層	深鉢	胴部	羽状繩文、織維合	ナデ	前	21	12
73	I C 0 c 区・整地層	深鉢	口縁部	組繩繩文 ?, 織維合	ナデ	前	21	12
74	IV D 4 d 区・整地層	深鉢	口縁部	L R繩文、織維合	ナデ	前	21	12
75	IV D 3 f 区・整地層	深鉢	胴部	L R繩文 (0段多条), 織維合	ナデ	前	21	12
76	IV D 5 f 区・整地層	深鉢	口縁部	L R繩文、織維合	ナデ	前	21	12
77	IV D 4 d 区・整地層	深鉢	口縁部	R L繩文、織維合	ナデ	前	21	12
78	IV D 6 f 区・整地層	深鉢	口縁部	L R繩文 (結束), 織維合	ナデ	前	21	12
79	IV D 2 f 区・整地層	深鉢	口縁部	口縁部無文、浅い平行沈線	ミガキ	中	21	12
80	トレンチ3・整地層	壺	肩部	平行沈線、L R繩文	ナデ	晚	21	13
81	IV D 2 f 区・整地層	鉢	胴部	沈線、L R繩文	ナデ	晚	21	13
82	IV D 6 e 区・整地層	鉢	口縁部	L R繩文	ナデ	晚	21	13
83	I C 0 a 区・整地層	鉢	胴部	沈線、L R繩文	ナデ	晚	21	13
84	IV D 5 h 区・整地層	浅鉢	口～底	变形工字文、口唇部内面沈線	ミガキ	晚	21	13
85	IV D 4 e 区・整地層	鉢	口～底	刻目突起6単位?、平行沈線、L R繩文	ミガキ	晚	21	13
86	IV D 4 d 区・整地層	深鉢	口縁部	R L繩文	ナデ	?	21	13
87	IV D 4 e 区・整地層	深鉢	口縁部	R L繩文	ナデ	?	21	13
88	トレンチ8・整地層	深鉢	胴部	無筋L?	ナデ	?	21	13
89	IV D 2 f 区・整地層	深鉢	胴部	L R (0段多条)・R L繩文	ナデ	?	21	13

## VI おわりに

今回の調査によって検出された遺構は、縄文時代の土坑7基と陥し穴1基である。これらの分布を見ると、土坑は尾根の先端部（A区南端）に比較的集中している傾向がある。陥し穴については、調査区外の東側の尾根沿いに広がる可能性があるが、1基のみの検出であり不明と言わざるを得ない。これら確認された遺構から、安柄野遺跡は縄文時代のある時期に、狩り場あるいは食料貯蔵地域などとして利用されていたものと思われる。前述のとおり、かつて行われた草地造成工事によって尾根頂部の地形改変が進み、消滅してしまった遺構もあったと推定される。また、遺物はほとんどが整地層から得られたものであり、造成工事の影響が大きいことがこのことからも窺える。

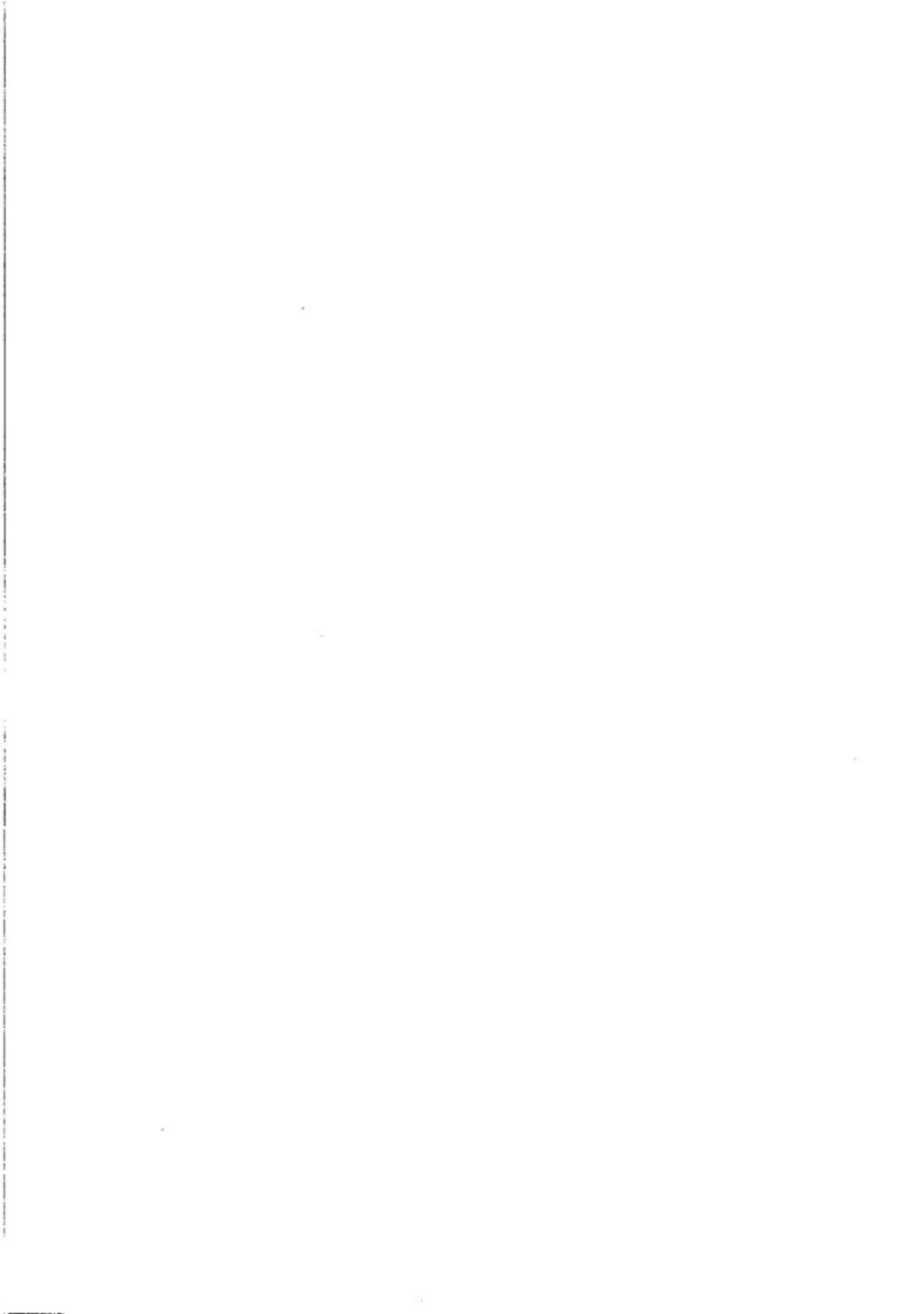
得られた遺物の中でも、石器類では石刀様の縦長剣片・木葉形の尖頭器や接合剣片資料、土器では晩期終末期の浅鉢形土器などが出土していることは、当時の山麓丘陵地における人々の生活・動きを考える上で貴重な資料になるものと考えられる。

最後になるが、今回旧石器時代にも属するかと思われる石器類が出土したことから、それが集中する地域については整地層下の第Ⅳ層も掘り下げたが、遺物は確認されなかった。

### 参考文献

- 金子祐知子 (1995) : 『才津沢遺跡発掘調査報告書』 岩文振興文化財調査報告書第278集(財) 岩文振興  
酒井宗孝 (1992) : 『石曾根遺跡発掘調査報告書』 岩文振興文化財調査報告書第279集(財) 岩文振興  
千葉孝雄 (1995) : 『上八木田I遺跡発掘調査報告書』 岩文振興文化財調査報告書第227集(財) 岩文振興  
中川重紀 (1982) : 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書—零石町桜松遺跡』 岩瀬文化財調査報告書第29集(財) 岩瀬文化  
成田正彦ほか (1991) : 『砂沢遺跡発掘調査報告書—本文編—』 弘前市教育委員会  
羽柴直人ほか (1996) : 『耳取1遺跡A地区遺跡発掘調査報告書』 岩文振興文化財調査報告書第232集(財) 岩文振興  
濱田 宏 (1996) : 『江刺家IV遺跡発掘調査報告書』 岩文振興文化財調査報告書第277集(財) 岩文振興  
三宅謙也ほか (1984) : 『亮場遺跡発掘調査報告書(第3次・第4次) 大タルミ遺跡発掘調査報告書』 青森県振興文化財調査報告書第93集 青森県教育委員会

# 写 真 図 版





遺跡全景

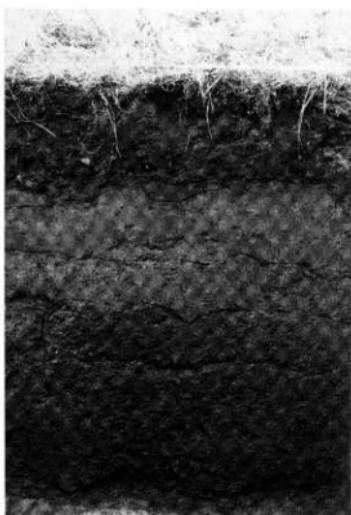


作業風景（B区）

写真図版1 空中写真・作業風景



調査区外北側法面

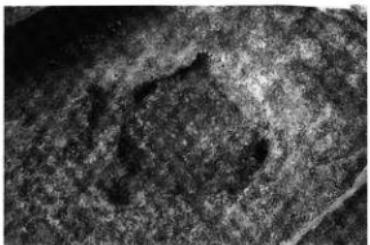


調査区内基本層序

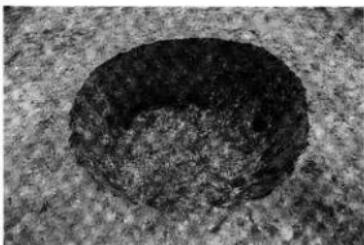


調査区外土層観察

写真図版 2 基本層序



1号土坑



2号土坑



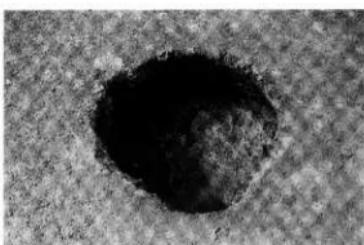
IV D 6 g 遗物出土状況



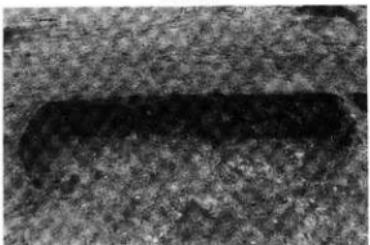
埋土断面



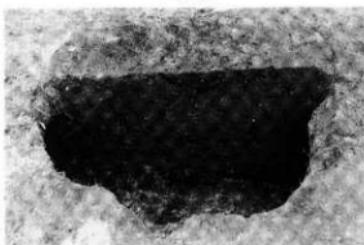
3号土坑



4号土坑

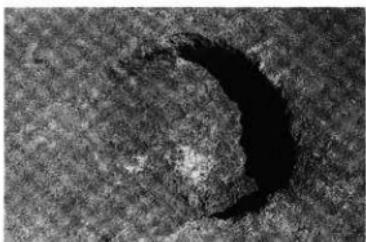


埋土断面



埋土断面

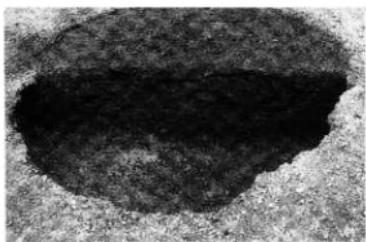
写真図版3 土坑（1～4号）



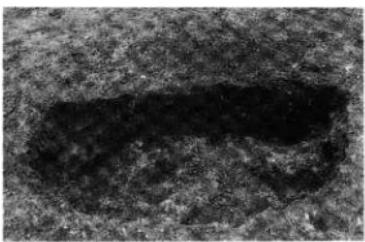
5号土坑



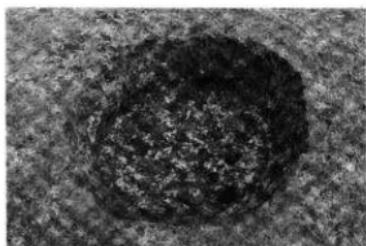
6号土坑



埋土断面



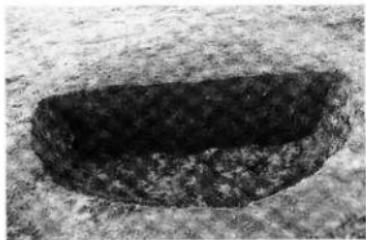
埋土断面



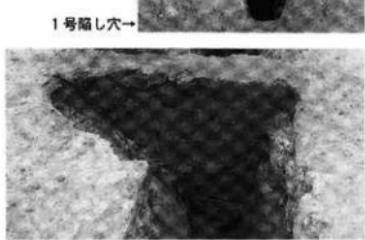
7号土坑



1号陷穴→

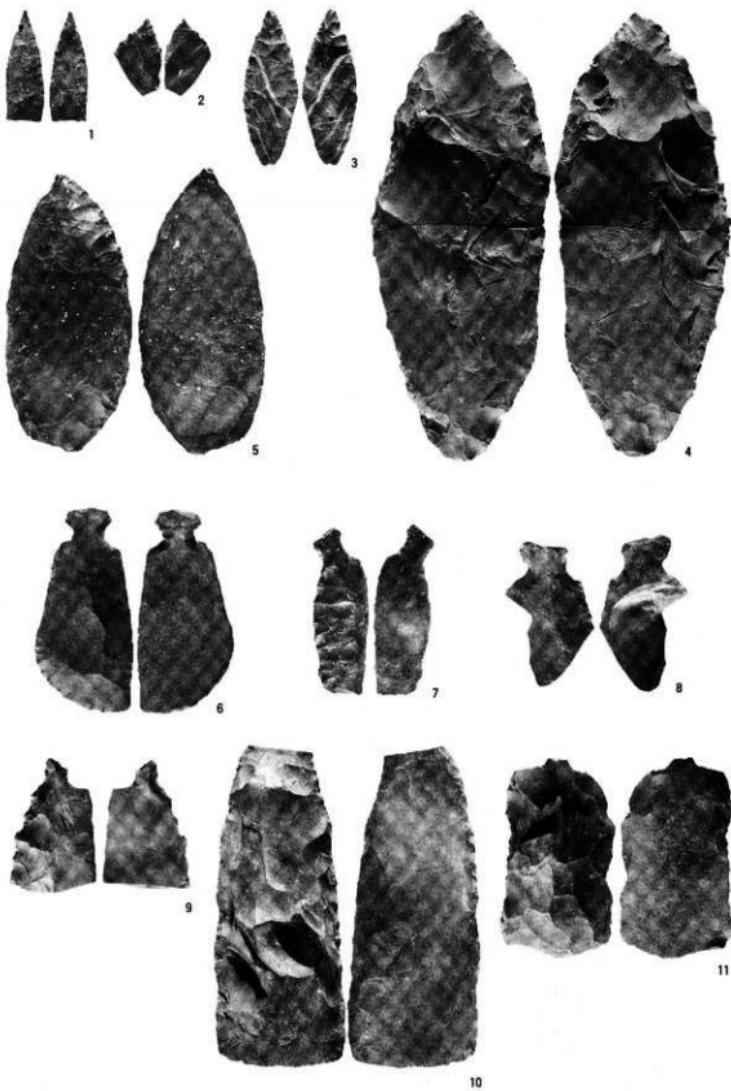


埋土断面



埋土断面

写真図版4 土坑(5~7号)・陷し穴(1号)

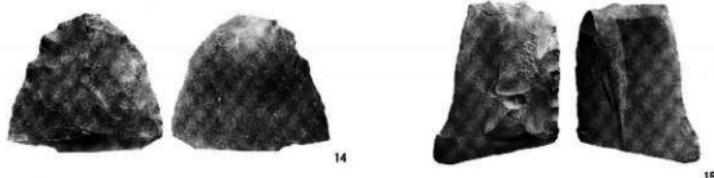


写真図版5 出土遺物（石器1）



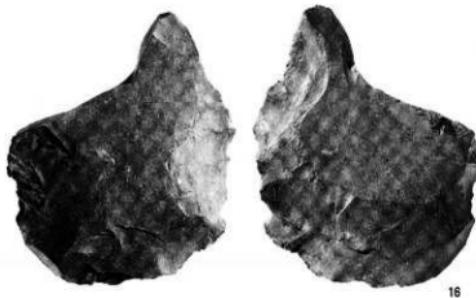
12

13

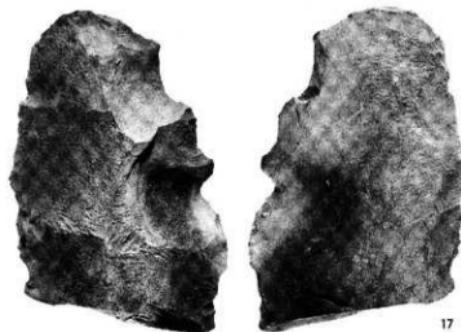


14

15

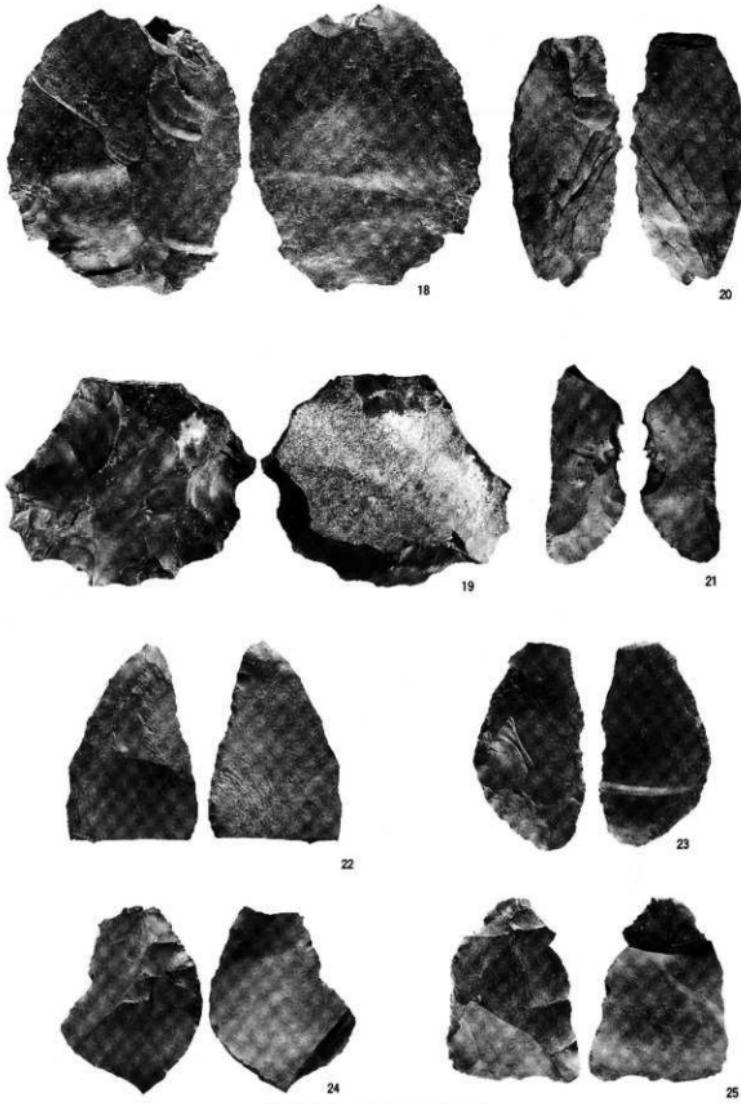


16



17

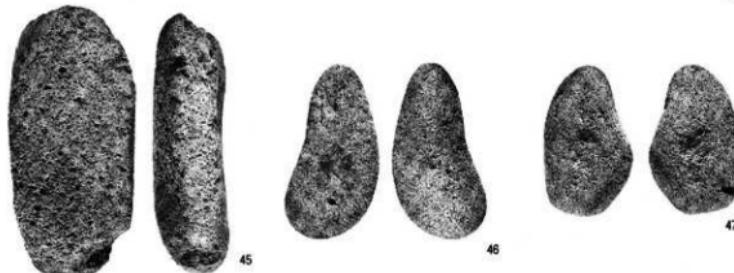
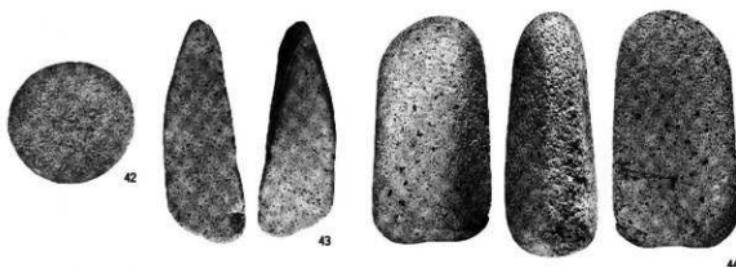
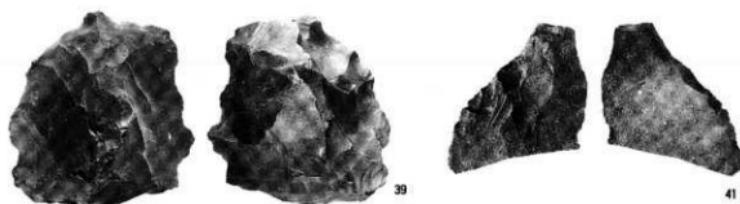
写真図版 6 出土遺物（石器 2）



写真図版 7 出土遺物 (石器 3)



写真図版 8 出土遺物（石器 4）



写真図版9 出土遺物（石器5）



写真図版10 出土遺物（石器6）



62



64



63

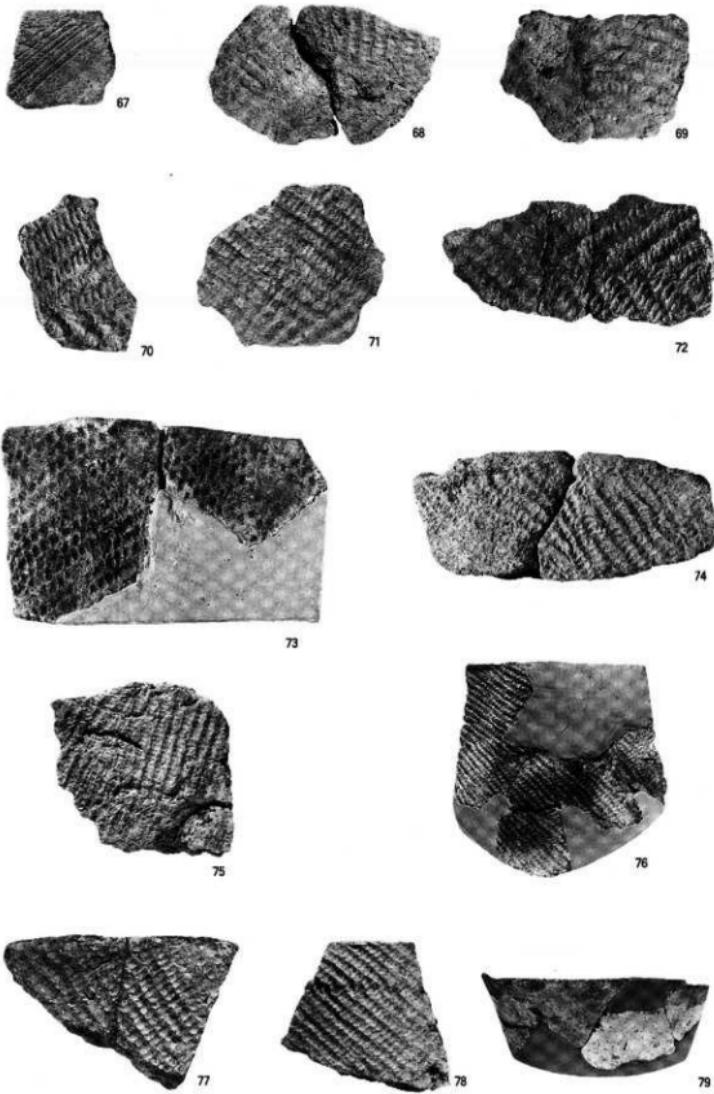


65

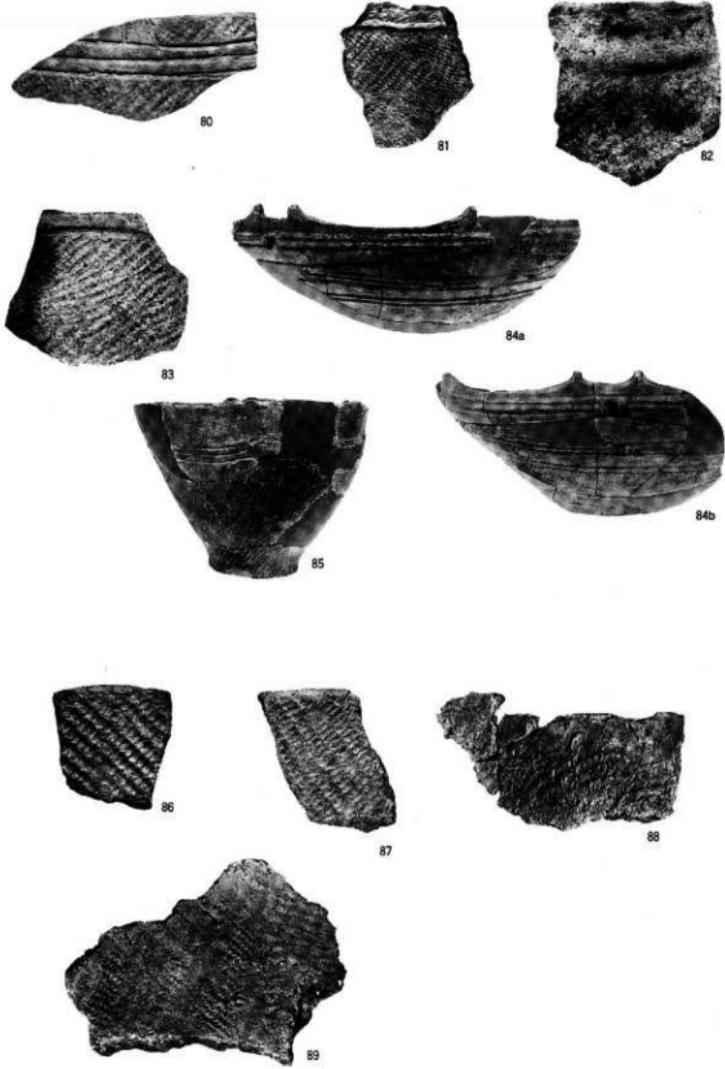


66

写真図版11 出土遺物（石器7）



写真図版12 出土遺物（土器 1）



写真図版13 出土遺物（土器 2）

## 報告書抄録

ふりがな	あづまいのいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	安栖野遺跡発掘調査報告書								
副書名	畜産經營環境整備事業関連発掘調査								
卷次	-								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第324集								
編著者名	濱田 宏・玉山健一								
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001								
発行年月日	西暦 2000年1月20日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
あづまいのいせき 安栖野遺跡	いわてけんいわてぐん 岩手県岩手郡 零石町大字橋場 ひだりおおじまちおおじまばじば 第4地割字安栖野 ほんぢ 129番地19ほか	市町村	遺跡番号	39度	140度	1998.9.1~ 1998.10.28	4,000m <sup>2</sup>	畜産環境整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
安栖野遺跡	散布地	縄文時代	土坑 陷し穴状遺構	7基 1基	縄文土器(早~晩期) 石器(縦長削片・凹石) ・磨石・石皿ほか)				

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第324集

## 安栖野遺跡発掘調査報告書

畜産経営環境整備事業関連発掘調査

印刷 平成12年1月14日

発行 平成12年1月20日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

印刷 株式会社 長内印刷

〒020-0122 盛岡市みたけ三丁目3-28

TEL (019) 643-5343

---

